

二〇二二年一月二十九日

頼よせて白梅の香を愛でにけり
春泥の長靴揃ふ集会所
北しぶく獣医は手術中と札
絵本みて間違ひ探し日向ぼこ
忌竹を越ゆるどんどの大焰
電柱を目安に曲がる雪の径
日を孕み冬芽蠢く大樹かな

やよい
みきお
むべ
素秀
なつき
豊実
凡士

二〇二二年一月二十八日

冬木いま御籤の花を満開に
置土産おむすびほどの雪だるま
酒蔵の杉玉に伸ぶ日脚かな
蠟梅の香を内に秘めほぐれそむ
一賀状「生きてまっせ」と書かれあり
葉ぼたんの渦のゆるびて寒明くる
雲低く波止を呑み込む寒の瀟
淡き色足して春めく万華鏡
厨事終へし窓より寒満月
音もなく都大路に雪雑り

やよい
あひる
千鶴
たか子
千鶴
もとこ
凡士
素秀
満天
むべ

二〇二二年一月二十七日

岩清水音閉じ込めし氷柱かな
浮寝して隠沼の鴨陣なさず
大阪の凸凹と見ゆ春霞
炭焼きの屋根に身を寄す雀どち
参道にあぶり餅食む四温かな
焚火の輪一枝くべて抜けにけり
梅堅しガイドの手持ち無沙汰なる

智恵子
やよい
あひる
素秀
凡士
そうけい
たか子

二〇二二年一月二十六日

子ら遊ぶ指人形の手袋で
湯気ほのと白湯に始まる朝かな
どんど火の中心突きてなだめたる
自句集に思い出たどり春を待つ

智恵子
あひる
なつき
菜々

二〇二二年一月二十五日

歴日の寺門の破風に冬日燦
豆入りは特に懐かし寒の餅
雲間より長閑にとどく飛機の音
大鳥居くぐり茅葺雪の茶屋
鳶職の屋根に軽々四温晴

せいじ
こすもす
あひる
凡士
素秀

二〇二二年一月二十四日

梅古木疎なる蕾をふくらませ
眼を閉じぬ眠り人形久女の忌
雪景色顎まで浸かる露天風呂
草庵の腰掛け石に日向ぼこ

明日香
素秀
智恵子
せいじ

二〇二二年一月二十三日

新しき鉛筆揃へ初句会
小春日のテラスに母の髪を切る
庭灯籠音なく濡らし寒の雨
鳴鍋や一句書き留む箸袋
埋み火や火起こし鍋にまろむ猫
どんど果つ燃えざる物の蹴り出され

菜々
智恵子
菜々
凡士
邑
たか子

毎日句会みのる選・二〇二二年一月三二日